

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第 1263 号	氏名	由井寿典
論文審査担当者	主査 駒津 光久 副査 山田 充彦 ・ 瀬戸 達一郎 ・ 川井 真		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>肥満の程度は Body Mass Index (BMI) で評価され、肥満 (BMI 30.0 kg/m<sup>2</sup>) は冠動脈疾患 (CAD) の発生率を高くする。心不全領域においても肥満は心不全を発症する独立した危険因子であるが、心不全発症以降においては反対に体重減少が独立した予後不良因子であると報告されている (肥満パラドックス)。虚血性心疾患領域においては、これまで経皮的冠動脈形成術 (PCI) 後の体重変化が長期予後に与える影響についての研究はない。よって、本研究では長野県内の 14 施設で PCI を受けた CAD 患者を登録した多施設共同前向きコホート研究である SHINANO Registry をもとに、PCI 施行時から 1 年経過した時点での BMI 変化をもとに 572 人の患者を、BMI 減少群・BMI 維持群・BMI 増加群の 3 グループに分けて、そこから 4 年間追跡した。</p> <p>その結果、以下の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. PCI 施行時の平均年齢は 70.2 歳で、平均 BMI は 23.9 kg/m<sup>2</sup>であった。baseline の BMI、高血圧・糖尿病などの冠動脈危険因子、冠動脈疾患の重症度など各グループ間の背景に有意差はなかった。</li><li>2. フォローアップ期間中に 60 人に MACE (major adverse cardiovascular events : 全死亡、心筋梗塞、脳卒中) が発生した。 Kaplan-Meier 分析では、BMI 減少群において、有意に MACE が多く発生した (log-rank 検定、p=0.004)。</li><li>3. MACE 内では全死亡・心筋梗塞に同様の傾向がみられ、脳卒中には有意差はみられなかった。</li><li>4. 多変量解析では、治療後の BMI 減少が、MACE に関する独立した予後予測因子であることが示された (HR : 2.14 ; 95% 信頼区間 : 1.29-3.57)。</li></ol> <p>以上より、本研究では PCI 施行後の BMI 変化が MACE と関連していることが明らかとなった。これらの結果から、PCI 治療後に BMI が減少している患者は、BMI に変化がない患者と BMI が増加している患者よりも MACE の発生率が高く、PCI 後の BMI 変化が予後予測因子となる可能性が示唆された。BMI 測定は、日常診療で時間・費用コストが少なく、計測が簡便であり、予後予測に広く利用できる可能性が期待できる。よって、本研究は臨床的に有用かつ意義の大きいものであり、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			